高等学校吹奏楽部におけるジェンダー
――大学生への調査から――

池　上　　徹*

A study of interviews about gender to students who belonged to high school Bands in Japan

Toru Ikegami

要約：学校教育に対するジェンダー研究は、部活動に大きな関心を寄せてきた。そこで最も大きな問題となっているのは運動部女子マネージャーであり、またそれを取り巻く運動部の問題が取り上げられてきた。一方で文化部に対する検討はほとんど行われていない。吹奏楽部は文化部の中でも大人数で練習を必要とするという運動部的側面を持ち、しかも人数的に女子が圧倒的優位にあるという特殊性を持つ。そこで大学生に対して部活動経験に関する質問紙調査を実施して高校時の吹奏楽部経験者をひろいだし、調査に同意した大学生 4 人にインタビューを実施してその経験の中であらわれるジェンダーについて聞いてみた。質問紙調査からは、吹奏楽部が女子生徒の部活動経験者の中でもっとも人数が多い部活動であることが明らかになった。インタビュー調査からは吹奏楽部での部活動の日常が圧倒的多数を占める女子を中心に回っていること、部長などの役職を決めるのに固定的性別役割分業観がみられないこと、楽器に対する性別の固定的意識も弱いことが明らかになった。今後は調査人数を拡大して普遍性を図るとともに、吹奏楽部による経験によってジェンダー意識がどのように変化したかさらに探る必要がある。

Abstract : Extracurricular club forms an interesting study in gender of the schooling. The biggest problems are women team managers in school sports clubs and various situations among them. On the other hand, gender researchers are not interested in girls of school culture club. School bands, one of culture clubs, have many members like sport clubs, and consists of the much more girl members than boys. So this study addresses girls in school bands.

First, a questionnaire found college students who joined school bands. Then four students of them, agreed with this study, are interviewed with on gender of school bands. The questionnaire found that the majority of girls, who experienced club, joined school bands. The interviews said that girls played a center role in club routine, and answerers had no gender role when they selected club captains and so on, and when they selected instrument players. The next study needs to increase answerers to generalize this result, and will explain a shift in gender bias by experiences of school bands.

Key words：ジェンダー gender　吹奏楽部 high school Bands　高校 high school　女子 girl's students　ジェンダー意識 gender role

*関西福祉科学大学　健康福祉学部　准教授

Ⅰ　学校教育におけるジェンダーと部活動

学校教育におけるジェンダー研究の中で、部活動は固定的性別役割分業や隠れたカリキュラム、進路などの主たるテーマとして取り組んできた分野にほぼ匹敵するだけの関心を集めてきた。

例えば『学校をジェンダー・フリーに』では「part 1　学校生活と性別分化」の中で、進路などの問題よりも先に第 4 章「クラブ活動における性別役割分業－女子マネージャーが性差別を支える」として、畠山（2000）が部活動の問題を取り上げている[1)]。

また同様に『男女共同参画社会と学校教育』においても「特別活動」の項目で賀谷（2002）が部活動での問題に触れている。そこでは「まず第一に前述の運動部女子マネージャー問題に対する継続的取り組みが必要」とされている[2)]。選手である男子生徒を“主”、マネージャーである女子生徒を“従”としてしまう、この運動部女子マネージャーの問題は、今なお続いているといっていい。全国高校野球選手権大会、いわゆる「夏の甲子園」で記録員としての女子マネージャーのベンチ入りを認める、といった本質的な解決とは全く異なる方向ばかりが目立ち、マネージャー的役割が固定的性別役割分業で捉えられていること、女子生徒にのみケア役割を期待するなど、この問題は依然として大きい。これまで課外活動に位置づけられてきたとはいえ、学校内で行われている教育活動としての部活動において、これだけの性差別構造が残っていることは確かに賀谷が言うように喫緊の課題である。

そしてこれら二つの研究からも明らかなように、部活動におけるジェンダー問題はとりもなおさず運動部の問題でもある。それは運動部で行われるスポーツが、身体性というこれもまたジェンダー研究において非常に強く注目してきた問題と密接に絡むからである。例えば先に挙げた『学校をジェンダー・フリーに』でも、続く第 5 章において熊安（2000）が「体育・スポーツと性役割の再生産」としてジェンダーの視点から体育・スポーツを見直すことの重要性を強調している[3)]。また運動部は特にセクシュアルハラスメントの防止という観点からも問題が多い。あるいは矢野ら（1999）も中学校における部活動の研究の中で、身体性に注目することが、女性／男性両方に対して重要であると指摘している[4)]。ほとんどの競技スポーツが男女で分かれて実施されているように、学校における部活動も運動部においては共学であっても「女子〇〇部」「男子〇〇部」となっていることも一般的である。女子だけの組織を作ることは女子生徒にリーダーシップやマネジメントなどの経験を得させやすいという効果もあるが、男女で分けてしまうことはこの身体性の問題をさらに強くする。

これらの先行研究は、部活動が正課外にもかかわらず、生徒たちに固定的性別役割分業を植え付け、性差別構造の再生産を教育活動として行ってしまっている実態を明らかにしてきた。今日においても先行研究が指摘してきた問題点はまだまだ解消されておらず、今後も強い取り組みが必要なことは事実である。

一方で先行研究は運動部における問題点の指摘に集中していて、文化部に対しての検討はほとんどないに等しい。その中にあって羽田野（2001）は文化部に参加している生徒も対象としたインタビュー調査を中学校で実施している[5)]。そこで指摘されていることは「部活動でいちばん楽しいこと」を聞いたところ男子で文化部は「友だちとのおしゃべり」が半数を超えるのに運動部は「練習」「試合」の 2 項目で半数を超えるという差があったことなど、示唆に富む。しかしながらこれも中学生に対する調査であり、高校生に対する調査ではない。一般に高校の文化部は、中学校における文化部や高校・中学校問わず運動部よりも、顧問である教諭の関与が低い場合が多い。そのため高校の文化部は生徒たち自身による活動が強まるという特

徴がある。まさに女子マネージャー問題に象徴されるように指導者から固定的性別役割分業観が与えられるわけではなく、生徒たち自らがどのようなジェンダー観を部活動から紡ぎ出していくか、が問われることになる。

したがって、先行研究が指摘する問題は重要ではあるが、先行研究が指摘してこなかった文化部におけるジェンダー問題がどのようになっているかを見ていくこともまたこれからの学校教育における部活動のあり方を考える上で必要な課題である。

Ⅱ　吹奏楽部とジェンダー

森（2006）は大学生に対するスポーツ観を中心とした質問紙調査において、性別役割分業意識が文化系活動所属者と運動系部活動所属者や無所属の学生とで異なる結果となったことを紹介している[6)]。すなわち文化部出身者は運動部出身者とは異なるジェンダー観を持っている可能性がある。森の研究では運動系部活動所属者はスポーツ場面での男女能力差を認めるほど相対的に性別役割分業意識が高かったが、文化系部活動所属者には有意差がなかった。

こういった文化部の状況を見ていく上で注目したいのは吹奏楽部である。吹奏楽部はブラスバンド部などとよばれることもあるが、日本独特の発展をした学校教育における課外の音楽活動である。特に21世紀に入ってからは「吹奏楽ブーム」とよばれる現象すら起きており、吹奏楽にかかわる中学生、高校生の数は少子化にもかかわらず相当数にのぼっていると言われる。

そしてそのブームを支えているのは多くが女子生徒であり、どの学校においても吹奏楽部といえば女子のほうが男子よりも人数が多い部活である、という状態が定着している。吹奏楽部では多数派は女子であり、男子は少数派に過ぎない。また吹奏楽部はその性格ゆえ一般的に少人数で行われる文化部とは大きく異なり大人数を有することが多い。そしてまた運動部と同じように練習が日々の活動の中心となり、コンクール出場ということが試合を目標として練習する運動部と似通っている。吹奏楽部に注目してみる理由はここにある。つまり運動部と同じように大人数で練習を必要としながら、女子が人数上優位を占める文化部の実態がどのようになっているのか、ということである。

吹奏楽部とジェンダーを関連づけた先行研究については森田（2005）がある[7)]。ここで森田は音楽教育の立場から、軍隊のために発足した、つまり男性だけのものであった吹奏楽が戦後、部活動として学校教育に取り入れられ、次第に女子が多くなっていく歴史を様々な側面から検討している。森田によれば転機となったのは昭和40年代だという。運動部の隆盛、男子たちにギターが流行りだしたこと、などを主たる理由としてあげているが、教育社会学の立場からは森田の論文でも少し触れられている高校への進学率が急激に上昇した時期であるということも大きな要因の一つだと考えられる。

そして森田は昭和50年代には男女の逆転が「ほぼ決定的」になってその後はひたすらその差が拡大して21世紀に入ってからは男子の割合がほぼ10%になったとしている。森田の論文の中でもとりあげられている2004年公開の映画「スウィング・ガールズ」は吹奏楽部は人数的に無理でもビッグバンドジャズなら可能だ、という少子化の中での兵庫県立高砂高校での実話を元にしているが、この映画において男子部員はたった一人であることがまさに象徴的である。

ただ、森田のこの研究では女子が増えたこと、また管楽器による音楽活動が多様化していることがあげられているものの、そのこととジェンダー意識との関連にまではふれられていない。21世紀に入ってからの圧倒的に女子が多い吹奏楽部員のジェンダー意識はどうなっているのか、今回はその一端を明らかにする試みとして、高校で吹奏楽部に所属していた大学生に対するインタビュー調査を計画してみた。

Ⅲ　調査の概要

調査はまず吹奏楽部出身者を抽出するとともに、吹奏楽部に限らず現在の高校での部活動全般を概観することを目的として質問紙調査を実施した。調査対象者は関西福祉科学大学で 1 年生対象開講科目の教育原論および 3 年生対象開講科目の総合演習 B の二つの教職課程科目を受講している学生計 217 名である。部活動全般について調査すること、それを教職課程科目で実施したこと、また調査内容を高校に限定した理由は、1990 年代半ば以降から部活動の衰退が問題視されていることによる。

部活動の衰退は指導者の確保の問題など中学校と高校に共通する理由によるものもあるが、一般的に中学校よりも高校のほうが深刻であるととらえられている。中学校では学習指導要領でクラブ活動が廃止される前から部活代替という考え方が浸透していたために加入率が 100％の中学校もあったこと、中学校は義務教育で地域密着でもあるし練習時間の確保が容易であるが高校は学区が広く通学手段も多様で放課後に部活動に専念することが中学校よりも困難なこと、またその下校途中という「娯楽」が高校生にはありうること、バブル崩壊後に高校生でもアルバイトをすることに歯止めがなくなってきたこと、などが理由としてあげられる。したがってそもそも現在の大学生がどの程度、高校生の頃に部活動をしていたのか把握する必要がある。そういった情勢の中で教職課程の履修学生は他の一般学生よりも学校文化に親和的であることは容易に想像がつき、それゆえ放課後も学校文化に浸ることになる部活動の経験率は高いものと予想される。そして今回の目的である吹奏楽部でのジェンダー意識をみるためには、指導者の影響力がより弱くなると考えられる高校のほうが適しているし、調査対象者の側も直近の学校生活のほうが思い出しやすい、ということもある。

質問紙調査のうち総合演習 B を受講する 3 年生に対してインタビュー調査の協力者を募った。3 年生に限った理由は、既に 2 年生の教職課程科目である教育社会学でインタビューを行う授業担当者から、ジェンダーと教育に関する基本的な講義を受けているからである。3 年生に限定することでインタビュー時にジェンダーの基本的概念を説明する必要がなくなること、また基本的概念を理解していないがゆえの聞き取りのずれが生じないようにした。吹奏楽部経験者のうち 4 人がインタビューに協力してくれることになり、それぞれ一人ずつ 30 分ほどのインタビューを実施した。

Ⅳ　質問紙調査の結果から

1. 回答者の属性および部活動経験

回答者の属性は表 1 の通りになっている。

性別で女子が 8 割を超えているのは女子が多い健康福祉学部の学生が 8 割近いためである。健康福祉学部の学生が多い理由はもともと教職課程希望学生が健康福祉学部のほうが多いことと、3 年生で実施した総合演習 B という科目が健康福祉学部の学生のみの開講だからである。それゆえ 3 年生の男子は 1 名のみとなっている。

部活動経験率は 170 人（78.3％）でかなりの学生が高校時に部活動をしていたことになる。2008 年 11 月実施のベネッセコーポレーションによる「小学生・中学生・高校生の生活時間の実態と意識に関する調査」によると、部活動の加入率は高校 1 年生が 75.6％、高校 2 年生が 67.4％、平均して 71.7％ となっている[8)]。この調査は全国規模で実施され高校生だけで 1822 名の有効回答数があり、今回の調査対象者はそれと比べるとやはり部活動経験者が多い、とい

表 1　回答者の属性（n＝217）

性 別		学 年		学　部	
女性	81.9％	1 年	65.0％	社会福祉学部	21.2％
男性	18.1％	3 年	35.0％	健康福祉学部	78.8％

表 2　部活動経験者の概要（n = 170）

学校設置形態		共学か別学か		中学生の時所属していた部活動	
公立	82.6%	男女共学	95.9%	同じ	50.6%
私立	16.9%	女子高	2.3%	違う種類の運動部	32.7%
国立	0.5%	男子高	1.8%	違う種類の文化部	16.7%

うことになるだろう。

2.　部活動経験者の概要

高校時に部活動を経験していた学生の、学校設置形態、男女共学か否か、中学生の時も同じ種類の部活をしていたかについてまとめたのが表 2 である。

学校設置形態は 8 割を超える学生で公立高校出身となっている。全国的な傾向とほぼ合致する。男女共学か別学かについてはほとんどが共学の高校に通っていた。女子高および男子高に通っていたのは全員私立高校の出身で 7 名だけである。

高校で部活動をしていた場合は中学の時も部活動をしていたようだ。中学生の時に所属していた部活動についてたずねたところ、「同じ種類の部」と答えた学生がほぼ半数となった。逆に言えば半数近くの学生が高校に入って新しいことを始めた、ということになる。

3.　クラブの種類

では実際にどのような部に所属していたのかについて自由記述で回答してもらったところ、その内容はかなり多岐にわたった。あらためて様々な種類の部活動が行われていたことがわかる。分類をみると部活動経験者 170 人のうち、運動部が 68%、文化部が 32% で運動部が 2/3 ほどを占める。人数が多かった部上位 5 つは次のようになった。

1. 吹奏楽　　25 人
2. バレーボール　　14 人
2. バドミントン　　14 人
4. 硬式テニス　　13 人
5. 陸上　　10 人
6. ソフトテニス　　9 人

一見して明らかなようにこれは全国の平均的な姿と異なる。調査対象者の 8 割が女子であるため、いわゆる女子に人気の部が集まり、男子に多い部は入っていない。

ただこれでもわかることは吹奏楽部の位置づけである。調査対象者に女子が多いと最も人数が多い部となる。上記 6 つのうち、吹奏楽部以外が全て運動部であること、また全体としても文化部の方が少数派であることからすれば、吹奏楽部が他の部にはない特色を有していることがはっきりする。なお、その吹奏楽部経験者は全て男女共学の高校出身で、一人だけ私立高校の出身、そして 25 人中 22 人が女子である。

また冒頭で述べたマネージャーの問題について、自由記述としたため例えば「サッカー部のマネージャー」といったように選手ではなくマネージャーだったことを明記した回答もみられた。こうした回答は合わせて 8 人いた。

4.　部活動の詳細

入部時期は「1 年生 1 学期」が 86.1% と圧倒的で、2 年生以降に入部したというのは 7.9% しかいない。部活動に入るのであれば高校に入って初めての学期の間に、というのが一般的であることをあらわしている。引退ないし退部の時期は「3 年生 1 学期」が 42.2%、「3 年生 2 学期」が 41.0% とこの 2 つの時期でやはり 8 割を超える。「3 年生 3 学期」と答えたのも 11.4 %おり、ほとんどの学生が途中でやめることなく高校生活を通して部活動をやり遂げた姿が見て取れる。

役職経験については 134 人（61.8%）がなんらかの経験がある、と答えており、教職課程を履修する学生が回答しているためか、役職経験の割合が高い。その 134 人中の内訳は「部長」17.9%、「副部長」26.1%、「その他の幹部」23.9%、「パートリーダーなど」9.2%、「マネージャー」16.4% だった。マネージャーの実数は 22 人で、先に述べたように自由記述で部活動の種類を答えてもらった際にマネージャーだったことを明記していた 8 人よりも多く、全回答者 217 人の 1 割になる。

部活動の経験が高校生活の思い出の中でどれぐらい大切か、パーセントであらわしてもらったところ、高い比率の回答がめだった。50% 以下と答えた学生は 22.3% に過ぎず、60% から 80% と答えた学生が 48.2% とほぼ半数近い。さらに 80% 以上と答えた学生が 29.5% で、部活動をしていた場合には高校生活においてその経験が非常に重いウェートを占めることがわかる。

その経験の中で「最も得たもの」を「一言で表現」するよう自由記述で回答を求めた。結果、「チームワーク」「協調性」「おもいやり」「仲間」といった他人との関係について答えたものと、「努力」「根性」「精神力」といった本人の内面の成長にかかわる答えにほぼ分類され、残りは「お菓子を作ること」といった部活動の内容にかかわる専門的な技能に関係するものだった。そこでそれぞれを「人間関係」「本人の成長」「専門的技能」の 3 つに分類すると、「人間関係」52.8%、「本人の成長」42.1%、「専門的技能」5.0% という結果になった。

さいごの質問として、大学生になった今でも高校の部活動と同じかそれに近い活動をしているか、たずねた。「今もしている」38.6%、「今はしていない」61.4% という結果になり、大学に入ってから高校の部活動と同じ活動を続けているのは 1/3 にとどまっている。

5. 性別で有意差があった質問

質問項目の中で、性別によって統計的に有意差があった質問が 2 つあった。それは「最も得たもの」を 3 つに分類した場合と、今も続けているかどうかに関する質問で、その結果が表 3 である。

「最も得たもの」を 3 つに分類した結果では、女子学生は「人間関係」に分類される答えを記した者が半数以上なのに対し、男子学生は「本人の成長」に分類される応えを記した者が 65% と正反対の結果となった。女子学生が部活動の中で他人との関係を重視しているのに対し、男子学生が自分自身の成長という個人的なほうに重きを置いていることがわかる。これは発達にまつわる男女差で一般的に指摘されることと合致した結果でもある。

今も続けているかどうかについても、「今もしている」割合が女子学生は 1/3 しかいないのに対し、男子学生はほぼ 7 割と全く逆転している。今回の調査では高校時の部活動について、その部活動に入部することを決めた理由を問うていない。仮に問うていれば、入部理由のところから女子が部活動の内容よりも人間関係を重視した結果としてどの部に入るか選択していたかがわかり、今続けているかどうかにも影響し

表 3　性別で統計的に有意差があった質問項目

	「最も得たもの」を 3 つに分類（n = 159）			今も続けているか（n = 165）	
	人間関係	本人の成長	専門的技能	今もしている	今はしていない
女性	57.1%	37.6%	5.3%	33.1%	66.9%
男性	30.8%	65.4%	3.8%	69.2%	30.8%

（p＜.05）　（p＜.01）

表 4　吹奏楽部かどうか、と中学時の部活動（n＝168）

	同じ	違う種類の運動部	違う種類の文化部
吹奏楽部	79.3％	8.3％	12.5％
その他の部	45.8％	36.8％	17.4％

（p＜.05）

表 5　吹奏楽部かどうか、と部活動で最も得たもの 3 分類（n＝160）

	「人間関係」	「本人の成長」	「専門的技能」
吹奏楽部	82.6％	13.0％	4.3％
その他の部	48.2％	46.7％	5.1％

（p＜.01）

表 6　吹奏楽部かどうか、と女子の人数（n＝98）

	10 人以下	11 人以上
吹奏楽部	19.0％	81.0％
その他の部	70.1％	29.9％

（p＜.001）

表 7　部活動をしなかった理由（n＝46）

入りたいと思う部がなかった	52.2％
バイトなどのほうが興味があった	19.6％
その他	28.2％
計	100.0％

ていることがはっきりしたかもしれない。

6. 吹奏楽部とそれ以外の部で有意差があった質問

統計的に有意差があったことについては、吹奏楽部とそれ以外の部とでの間でもみられた。その結果が表 4、表 5 である。

吹奏楽部経験者のうち 8 割近くが、中学生の時にも吹奏楽部に所属していた。吹奏楽部以外の部の経験者で、中学生の時に同じ部に所属していたのは半分にも満たないので大きな差である。これは吹奏楽部が楽器を演奏する、という音楽的才能が求められるためであろう。

部活動で最も得たものに関して自由記述してもらったものを 3 つに分類した結果についても、吹奏楽部とその他の部で大きな差があった。

吹奏楽部経験者のうち「人間関係」に関する答えだったのは 8 割を超えている。吹奏楽部以外の部の経験者が「人間関係」と「本人の成長」で拮抗しているのとは対照的である。これにはもちろん吹奏楽部経験者のほとんどが女子学生である、ということも影響しているだろうが、それ以上に吹奏楽の特色が現れたものだといえるだろう。

また調査では部活動での同級生の人数を男女別に聞いた。吹奏楽部経験者は全員男女共学の出身だったので、ここでは男女共学の高校出身者のみのデータをみることになる。男子の人数はこれまでの知見通り、吹奏楽部もほぼ 10 人以下と少ない。女子の人数は 10 人以下と 11 人以上でわけると表 6 のようになった。

ここから吹奏楽部がやはり大規模であることがはっきりする。調査では同級生の人数だったが、実際に同時に活動している上級生や下級生を入れることを考慮すると部活動としてはかなりの大規模であることが想像される。

7. 部活動をしなかった理由

質問紙調査のさいごに、部活動をしなかった 46 名に、その理由も聞いてみた。その結果が表 7 である。

「入りたいと思う部がなかった」と答えた学生が半数を超えている、これらの学生は仮に興味関心を満たす部があれば高校時に部活動に加入していた可能性はある。

Ⅴ　インタビュー調査の結果から

インタビュー調査の依頼をした総合演習 B

の履修学生で吹奏楽部経験者は 14 人だった。そのうち 4 人がインタビュー調査に協力することを承諾した。その 4 人のインタビュー協力者には日程を打ち合わせて一人ずつ 30 分ほどのインタビューを実施した。場所は調査実施者の研究室で、録音の可否をインタビュー協力者にたずね、全員から承諾を得て会話を録音した。4 人のプロフィールは次のようになっている。

A さん

楽器はクラリネット。高校は 100 年以上の伝統があり高等女学校の流れをくむ。そのため 5 年ほど前まで家政科を前身とする科があり、その影響で吹奏楽部の定期演奏会でもポップスのステージでパート毎に衣装を自作してファッションショーを行う、という特徴がある。伝統ある進学校でもあるので、2 年生の間にほぼ引退する。質問紙調査での思い出をパーセンテージで表したのが「50%」なのもそれが理由となる。顧問は音楽教諭で指揮を振る。高校全体の規模は 1 学年 320 人で、吹奏楽部は女子 22 人、男子 3 人。したがって女子は 10 人に一人は吹奏楽部で、同じぐらいの規模の部は野球部とソフトテニス部ぐらい。

B さん

楽器はホルン。中学生の時は未経験ではあるが、音楽に関連することは続けていた。高校は県有数の進学校で、A さん同様に質問紙での思い出のパーセンテージは「75%」になる。歴史ある高校であるが吹奏楽部の歴史は浅く 30 年もない。そのため顧問の教諭が深く関わることはなく日々の練習場所も音楽室を独占できているわけではない。3 年生進学直後の定期演奏会で引退。高校の規模も A さん同様に 1 学年 320 人で、吹奏楽部は女子 20 人、男子 2 人。同じぐらい多いのはアメリカンフットボール、サッカー、ラグビー、女子バレーボール、テニス、女子ハンドボール、といった具合に運動部が盛んな高校でもある。

C さん

楽器はフルート。楽器は今でも続けていて、高校時は副部長を経験し、また今の楽団でも代表の立場にあるが、やはり進学校ということで質問紙の思い出のパーセンテージは「70%」。引退は 3 年生の 5 月に仮引退となるものの、夏のコンクールにも希望者は出場する。高校の規模もやはり 1 学年 320 人で、吹奏楽部は女子 27 人、男子 2 人。同じぐらいの規模の部はバドミントンぐらいだろう、とのこと。

D さん

楽器はチューバ。この高校の吹奏楽部はコンクールの県代表常連校で、したがって学区有数の進学校ではあるが、質問紙の思い出のパーセンテージは「90%」。6 月に定期演奏会をするという珍しい年間スケジュールで、その後コンクール出場のためのオーディションに落ちると引退する場合がほとんど。コンクールにはもう一つ結成して一般の部に OB が指揮者として出場するほど。高校の規模はやはり 1 学年 320 人で吹奏楽部は男子 5 人、女子 26 人。女子は文理クラスに分かれる前は「どのクラスにも吹奏楽部員がいる」状態で、ここまでの規模の部は他にないだろう、とのこと。

1. 役職者の決定

これまでのジェンダー研究で問題にしてきたことの一つは、「生徒会長」「部長」といった「長」とつく役に固定的性別役割分業観が働き、本人の向き不向きにかかわらず男子をあてようとする教師の無自覚な行動だった。これによって教師は男女共同参画社会への方向ではなく、性差別的な構造を再生産することに荷担していることになる。この問題への指摘が注目されてから 20 年近くが経ち、中学校の生徒会活動などでは「むしろ女子が熱心」という声も上がっているとは言うが、一般社会に目を転じれば日本ではまだまだ企業などでの女性の管理職

は珍しく、学校教育の場で女子にリーダーシップなどを発揮させる機会を設けていくことは重要である。

高校の文化部、特に吹奏楽部に注目した理由の一つがここにあって、すなわち高校の文化部の部活動なので顧問の教諭ではなく生徒たち自身で決める度合いが中学校よりも格段に高くなる。しかも吹奏楽部の場合は大人数なので組織をまとめていく力が求められるし、部長以外にも学生指揮者など様々な役職がある。これらをどのように決めていたかを聞いてみた。

すると、4 人とも生徒たち自身で決める、という点は共通していた。A さん、B さん、D さんの高校はそれぞれ部長を決める際には立候補を募り、多数決で決定していた。部長以外にも副部長なども立候補で決めていた。3 人とも立候補者がおらずに困る、というような事態はなかったという。そして A さん、B さん、ともに部長は女子だった。D さんの学年は部長は男子になったが、1 年生の時の 2 年、3 年の上級生、3 年生の時の 1 年、2 年の下級生の 4 つの学年については部長、副部長ともに全員女子だという。A さん、B さんの高校も同じで、3 人とも学生指揮者が男子になることはよくあるようだった。また 3 人とも「部長が女子なら副部長は男子」といった両性が入るようなことは一切していない、ということだった。

一人、C さんの吹奏楽部だけは当該学年ではなく上級生が決めるというやり方を取っていた。が、これも 2 年下の学年の学生指揮者が男子だった以外は全て女子だったという。

また、4 人にはコンクール時の表彰式で各高校の部長が並ぶ時のことも思い出してもらった。やはり他の高校も同様に女子が多く並んだという。先に挙げた森田の論文では昭和 50 年代には吹奏楽部は人数的に女子が優勢になっていた、と述べているが、昭和 60 年代、すなわち 20 年ほど前のある県の地区大会の表彰式ではほとんど男子が並んでいたことからすれば、大きな変化である。確かに吹奏楽部に所属しているのは圧倒的に女子ではあるが、インタビュー協力者の 4 人たちには「部長＝男子」という構図はなく、しかもそれは今日の吹奏楽部経験者に共通している可能性が高い。

すなわち、「長は男子がするもの」というステレオタイプを乗り越え、性別にとらわれることなくリーダーシップを発揮したい生徒がそれを表明し、まわりがそれを認める、という姿が高校の吹奏楽部に出現している、ということである。たとえ人数が少なくとも固定的性別役割分業観から役職者を男子から選ぶ、という発想は彼女たちにはない。しかもそれが、例えば教師が役職者を決めるようなかたちでジェンダー・フリーな教育をめざす意図的な結果としておこったのではなく、生徒たち自身が決めるなど自然とこうなってきたことに意味がある。役職者が女子になればそれで解決、という問題ではないが、ジェンダー・フリー教育にかかわる研究がめざしてきたことが不完全ではあるものの、実現しつつあるのである。

2. 女子の人数が圧倒的優位な状況

インタビュー協力者には「日々の練習の中で、『男子だからこれをやってよ』とか言うようなことはあった？」と質問したところ、4 人とも質問を投げかけてすぐには思いつかない様子だった。先に述べたように、インタビュー協力者である 3 年生は、2 年生時に「教育社会学」の講義でジェンダーに関する基本的な講義を受けているため、調査実施者の質問は意図通りに理解できているのだが、思い出せないようだった。

A さんは「男子のほうがおされてる」と答えてくれた。D さんは「楽器運びはしっかりやってね、と言ったぐらいかな」と答え、C さんも楽器運搬しか思いつかないようだった。確かにコンクールの時には短時間でかなりの重量があるパーカッションなどを相当距離手で持って運ぶ必要があり、そのような台詞が出てくるものと思われる。が、先の役職者の決定と同様

に、日々の部活動の中でも「男子だから」「女子だから」という意識が表層にあがることはないようだった。A さんや C さんは部活動の中で合宿があったとのことだったが、そこで「女子だから料理をしないと」ということもなかったという。二人とも女子のほうが部屋などを優遇されることを懐かしそうに話していた。

ここにあらわれているのは、女子マネージャー問題にあるような、男子が中心にあって女子が周辺を担う、ということとは全く逆の日常である。それは一つには吹奏楽部の日常が部員全体で集まることは少なく、パート毎に分かれた練習が主体ということもあるだろう。部もさることながらパートに対する帰属意識が強く、パート毎になれば男子は一人か二人、という状態になる。そこでは男子は A さんが言うように頼る存在ではなく周辺に位置する存在である。

もちろん、これらはあくまでもインタビューの結果であって、部活動の日常を実際に観察調査などをすればまた違う側面が現れてくるだろう。また、女子が圧倒的打数であるが故に、逆に男子が少数派として尊重されなければジェンダー・フリーではなくなってしまう、という問題もある。ただ、少なくとも吹奏楽部経験者が過去をふり返った意識としては「女子は男子に守られる存在」というステレオタイプな固定的性別役割分業観はみじんもない。

3. 男子が担当していた楽器

そのパートについて、4 人それぞれに男子がどのパートだったかを聞いた。楽器には様々な付帯イメージがあるが、その中には女性性や男性性を帯びたものもある。代表的によくとりあげられるのがフルートで、30 年ほど前までは「男の楽器」と言われていたのが、今では「女の楽器」と思われていることがほとんどである。フルートはその構造から相当量の息を必要とするために「男の楽器」と思われていたのが、演奏時の姿が女性性を強化するものとして「女の楽器」にかわったものと思われる。

インタビュー協力者には男子が担当していた楽器を聞くかたちとした。その裏返しで女子がどのような楽器を担当していたかがわかるためである。

A さんの同級生の男子が担当していたのはサクソフォーン、コントラバス、パーカッション。1 学年下には A さんと同じクラリネットの男子もいた、とのこと。B さんの同級生の男子が担当していたのはトロンボーンとチューバ。1 学年下にはフルートやバスクラリネットがいて、1 学年上にはオーボエが二人、バスクラリネット、テナーサクソフォーンと全員木管楽器だったとのこと。C さんの同級生の男子はテナーサクソフォーンとトランペットで、他の学年も金管楽器かサクソフォーンか、という感じだったとのこと。D さんの同級生の男子はトランペット、トロンボーン二人、チューバ、サクソフォーン、で C さんと似ているが、A さんや B さん同様に他の学年にはフルートやクラリネットがいた、とのことだった。

この結果からは、やはり男子が低音だったり金管、サクソフォーンなど肺活量がより必要だったり重かったり、という楽器を担当しがちであることがわかる。ただ、男子がフルートやオーボエなどの楽器も担当しているし、また男子の人数が少ないこともあって、B さんや D さんのように女子で金管楽器を担当していることは当然のことになっている。楽器が持つステレオタイプなイメージから少しは自由になってきているものと推測できる。

Ⅵ　今後の課題

以上、質問紙調査とインタビュー調査からこれまでジェンダー研究が問題にしてきたことがある程度解消され、新しい段階に踏み込もうとしていることが確認できた。

ジェンダー・フリーな学校教育をめざす上での課題はまだまだ山積しているが、しかしながら少なくとも高校の吹奏楽部で、不完全とはいえジェンダー・フリーな状況が出現しているこ

とは評価したい。特にインタビュー調査で明らかになったように、部長などの決定において性別カテゴリーを用いていないこと、また日常の中でも男子優先の発想が全くみられないことなどは、今後のジェンダー・フリー教育を考えていく上で参考になるだろう。

特に強調しておきたいことは、それらが教師による意図的な結果ではなく、ごく自然なこととして受け入れられていることだ。ジェンダー・フリー教育に対する 21 世紀に入って以降のバッシングには、ジェンダー・フリー教育を「教師が強制している」とするものがあるが、決してそのようなことをしなくとも状況が整えば高校生たちは自然と性別カテゴリーを使わずに本人の能力をみるようになるのである。

一方で本研究は試みにインタビュー調査を行ったに過ぎない。そのインタビュー調査も予定していた人数を集めることができなかった。3 年生は定期試験、4 年生は教員採用試験の最中となってしまい、協力を取り付けていてもインタビューを実施できなかったほうが多かった。まずはインタビューの人数を増やして、今回の知見の普遍性をはかっていくことが考えられる。

さらには今回のインタビューでは、インタビュー協力者のジェンダー観について深く掘り下げて聞くことができなかった。結婚観やライフスタイルに対する意見なども聞きながら、特に吹奏楽部の経験によってジェンダー観が変わったのか変わらなかったのか、といったあたりを突いていくことが本来はもっと必要だった。

また楽器が持つ性別イメージについてもほとんど取り組めないままだった。「女子だからこの楽器」「男子だからこの楽器」ではないかたちでの楽器の担当のあり方が垣間見えてきてはいるが、この点についておさらに探っていかなければならない。

質問紙調査で吹奏楽部経験者が最も多く、インタビュー調査で 4 つの高校全てで学年の女子の 1 割以上が吹奏楽部員、という結果から考えるに、吹奏楽ないし吹奏楽部がもっている影響力は大きい。質問紙調査でみたように、高校時の思い出として部活動の経験は非常に大きな位置を占める。だからこそ、部活動において固定的性別役割分業観を再生産するのではなく、ジェンダー・フリーな状況を加速させる必要がある。本論で明らかになってきた、吹奏楽部が持つジェンダー・フリーな状況をさらに拡大発展させていくことがこれからの学校教育に求められるのである。

謝辞

調査にご協力くださいました学生のみなさん、特にインタビュー調査に協力いただいた 4 人の学生に、この場を借りてお礼申し上げます。

注

1）畠山幸子「クラブ活動における性別役割分業－女子マネージャーが性差別を支える」亀田温子・館かおる編著（2000）『学校をジェンダー・フリーに』明石書店、81～97 ページ。

2）賀谷恵美子「特別活動」広岡守補編（2002）『男女共同参画社会と学校教育－男女共同参画社会の形成に向けて学校は何をなすべきか』教育開発研究所、108～111 ページ。

3）熊安喜美江「体育・スポーツと性役割の再生産」前掲書、99～125 ページ。

4）矢野博之・羽田野慶子・荒川英央・西島央・藤田武志（1999）「中学校生活と部活動に関する実証的研究（2）－家庭環境・人間関係・ジェンダー意識－」『日本教育社会学会第 51 回大会発表要旨集録』、119～124 ページ。

5）羽田野慶子（2001）「ジェンダーの社会化装置としての部活動」『日本教育社会学会第 53 回大会発表要旨集録』、280～281 ページ。

6）森康司（2006）「スポーツ実践とジェンダー観－大学生調査から－」『人間科学共生社会学』第 5 号、77～88 ページ。

7）森田信一（2005）「クラブ活動としての吹奏楽の変遷－女性進出の視点から－」『富山大学教育学部紀要』第 60 号、131～140 ページ。

8）Benesse 教育研究開発センター（2009）『放課後の生活時間調査　子どもたちの時間の使い方［意識と実態］速報版』、16 ページ。